

《巻頭言》

日清戦争と陸奥外交 — 『蹇蹇録』 に学ぶ —



政策提言委員・拓殖大学海外事情研究所准教授 丹羽文生

過日、山口県下関市の日清講和記念館を見学して以来、超ローペースだが、陸奥宗光が書いた『蹇蹇録』を読み返している。1894年2月に朝鮮で起きた東学党の乱から1895年4月の三国干渉までの日清戦争前後における外務大臣としての陸奥の苦悶が綴られており、明治外交史上の第一級史料と言われている。『蹇蹇録』が初めて衆目に触れたのは1929年1月のことである。陸奥が死去してから32年も経ってからのことであった。外務省の機密文書を数多く引用しているため長い間、秘本扱いとなっていたためである。

「蹇蹇」とは「蹇蹇匪躬」という中国古典『易経』に出てくる言葉によるもので、「蹇」は足が萎えて自由が効かない状態、「蹇蹇」は結果の善し悪しを問わず力の限り尽くすことを指す。実際、陸奥は日清戦争後、宿痾の肺患が悪化しながらも最後の力を振り絞って『蹇蹇録』を書き進めた。

日清戦争は、言わば日清間における朝鮮半島争奪戦である。清国だけでなく、ロシアにとっても日本への勢力拡大を図る場合、朝鮮半島を掌中に収めなければならない。故に日本としては清国の朝貢国たる朝鮮を清国から引き離す必要があった。そこで陸奥は、朝鮮問題に通暁するスペシャリストを朝鮮に置いて情報収集に努め、列強からの余計な介入を排除するため、清国が戦争の「主動者」であり、日本は止む

を得ず交戦することになった「被動者」であると装い開戦に持ち込む。現代人の感覚から言えば、陰険、狡猾に思えるかもしれないが、これが本来の外交である。

結果的に陸奥の作戦が見事に功を奏し日本は勝利する。ところが、その後、清国との間で結んだ日清講和条約に基づいて割譲を受けた遼東半島、台湾、澎湖諸島のうち、遼東半島を清国へ返還するようロシア、フランス、ドイツが勧告してきた。三国干渉である。日清戦争で国力を消耗した日本が、これらに抗するのは無理と判断した陸奥は「余は当時何人を以てこの局に当らしむるもまた決して他策なかりしを信ぜんと欲す」と、苦渋の決断を下し要求を受け入れた。この言葉は負け惜しみでもなければ言い訳でもない。当時のパワー・ポリティクスの現実を踏まえ、あらゆる手立てを尽くした上での最善の選択であったという烈々たる自信と信念が伝わってくる。

覇権を企て日本周辺 of 安全保障環境を脅かす中国、事大主義丸出しで中国に擦り寄り反日キャンペーンを繰り広げる韓国、核兵器や弾道ミサイル開発を続ける北朝鮮、強引な領土拡張と資源獲得に直走るロシアと、まさに今日の日本が置かれている状況は日露戦争前夜と酷似している。『蹇蹇録』は現代の日本外交を考える上でも最良のテキストになるのではないだろうか。